

わたしの戦争体験

有田光雄



〈コメント〉

2015年は、戦後70年の節目の年だった。憲法9条の力は、70年の長期にわたって、殺し、殺される悲劇と無縁の歴史をつくってきた。日本国憲法こそは、人類の先駆的灯台。それを一挙にくつがえす安保法制Ⅱ戦争法のたくらみほどの愚行はない。わたしが、在宅介護の合間を縫って戦争法反対を訴えたのも、少年の胸底深く刻み込まれた戦争体験からである。

この一文は、年金者組合大山崎支部の機関紙、「年金大山崎」に掲載したものである。

「あれ！ おかしいな？ こんな上天気の朝に雷か？」
1945年8月6日 午前8時15分。

このとき、わたしは、まだ15歳の少年。海軍士官になる夢を抱いて瀬戸内海に浮かぶ大島海岸の松林で軍事教練のど最中だった。匍匐前進しながら、ふと、東方上空に巨大な光芒を望見した。教官は、翌日の朝礼で「敵は新型爆弾をつかった。」

と説明した。

わたしの見たのはピカドンの瞬間だったのだ。

それから、9日後に迎えた終戦日。

この日を境にして昨日までの白が黒に変わった。

これまで、学校で教わっていた、「自存自衛の正義の戦争」が、実は、「植民地支配と侵略」の戦争だったことを知ってビックリ仰天した。

ほんの一群の勇氣ある人々を除いて、みんな騙されていたのだ。

歴史は繰り返す、と言う。安倍政権の戦争法と集団的自衛権の行使、沖縄新基地の建設など、まぎれもなく「この道はいつか来た道」。

高齢のわたしが、きびしい老々介護のあいまを縫ってマイクを握ってきたのも、なにがアカンと言っても、戦争だけは絶対にアカンからだ。

（「年金大山崎」2016・2・1）